

2015.7.19 年間第16主日

群集を深く憐れむ

マルコによる福音 6:30-34

(そのとき、)、使徒たちはイエスのところに集まって来て、自分たちが行ったことや教えたことを残らず報告した。イエスは、「さあ、あなたがただけで人里離れた所へ行って、しばらく休むがよい」と言われた。出入りする人が多くて、食事をする暇もなかったからである。そこで、一同は舟に乗って、自分たちだけで人里離れた所へ行った。ところが、多くの人々は彼らが出かけて行くのを見て、それと気づき、すべての町からそこへ一斉に駆けつけ、彼らより先に着いた。イエスは舟から上がり、大勢の群衆を見て、飼い主のいない羊のような有様を深く憐れみ、いろいろと教え始められた。

説教

ふつうテストといえば100点満点です。80点で上出来、70点でまあいいか、50点ならもうちょっと、30点で赤点、こんなかんじでしょう。ところで、いつも100点とっているような優秀な友達がいました。彼が大学に進学してびっくりしたのはテストで100点取るのが目標じゃなくて、120点、150点という点数があったということです。自分は100点以上は取れないとあっさりシャッポを脱いで、彼は理系から文系に鞍替えし、卒業後はいわゆるキャリア官僚として働いています。120点のはなしがよくわからなかったので、問い直したところ120点どころじゃない、300点、500点、1000点というのもあると彼はいいます。わたしはますますわけがわからなくなりました。

きょうの福音は地味なんですけれど、これがキリスト教だという真髓が示されています。

イエスは舟から上がり、大勢の群衆を見て、飼い主のいない羊のような有様を深く憐れみ、いろいろと教え始められた。6:34

イエスさまが大勢の人々を深く憐れんだ、というくだりです。この「憐れむ」ということはキリスト教そのもの、キリスト教の真髄です。

さっき地味といったばかりですが、きょうの福音のテキストは見方によってはちょっと漫画みたいなんです。12人が派遣されてほうぼうを廻ってイエスの元に戻ってきた。派遣するときは杖と靴だけで下着は1枚、なんてきびしいことをいていたイエスも、帰ってきた弟子たちには親切にまあ骨休みでもしなさい、って声をかけています。でもそこはイエスさま目当ての群集でござったがえして、ここじゃなんだからって舟に乗って「人里はなれた」処にいきます。漫画チックなのはここからなのですが、舟に乗ったイエス一行を見た多くの人たちはガリラヤ湖の沿岸を急ぎ、先回りしちゃった。それを見たイエスの様子がさっきの34節です。群集は元気で健康な人はそうはいなかったのではないのでしょうか。イエスを必要としているのは健康な人ではなく病人です。イエスご自身もそういつています。

ファリサイ派の人々やその派の律法学者たちはつぶやいて、イエスの弟子たちに言った。「なぜ、あなたたちは、徴税人や罪人などと一緒に飲んだり食べたりするのか。」イエスはお答えになった。「医者が必要とするのは、健康な人ではなく病人である」ルカ5:30-31

この大勢の人たちがイエス様を追っかけて、先回りして、岸辺でイエス様を今や遅しと待ちかまえている光景は悲惨すぎるのでかえってマンガのようにおもえてきます。病気の人もある。子どもを抱えた人もいる。その病人を連れてきた人もいる。精神病の人もある。ものすごい不運に見舞われて苦しんでいる人もいる。そしてみんな貧しい。おなか空かせて、ほこりまみれになって、汗かきかき湖を走って半周して、イエス様を先回りして、必死な眼差し（中には血走った人もいる？）ではあはあゼイゼイいつて待っている。

その群衆を見た時、イエス様は深く憐れまれます。飼い主のいない羊みたいだ、とそんな彼らをかawaiiそうにおもうのです。

この「憐れむ」ということばは、今の日本語でいうならば「かわいそう」というニュアンス、それも胸が張り裂けそうにかわいそうに、と思うという感じでしょうか。ある福音書（本田哲郎神父訳）では「はらわたする」と訳されています。ルカ福音書では同じ単語「憐れ」はこの箇所にてできます。

ところが、旅をしていたあるサマリア人は、そばに来ると、その人を見て憐れに思い、近寄って傷に油とぶどう酒を注ぎ、包帯をして、自分のろばに乗せ、宿屋に連れて行って介抱した。ルカ 10:33-34

このサマリア人は翌日になって宿屋の主人にデナリオン銀貨二枚を支払い、足りなかったら帰りに払うと行って去っていきます。仮に憐れみテストというものがあったとすると、サマリア人は何点とったのでしょうか。50点、80点、100点、それとも120点？300点？

サマリア人の前には祭司とレビ人が通りかかっていますが、見てみぬ振りをして通り過ぎました。彼らに点数がつくとして何点なのでしょう？

「大勢の群衆を見て、飼い主のいない羊のような有様を深く憐れ」られたイエスさまの憐れみは神の愛そのものです。イエス様がかわいそうだと思われた、はらわたをつき動かされた、その主のみこころはわたしたちの中にもあります。主イエスがともにいてくださるから、わたしたちの心の中にもその火は確かに灯っているのです。

わたしたち一人ひとりが、主にかわいそうにと声をかけられ、なぐさめられ、そして呼び集められてキリストを主と仰ぐ者たちとなりました。辛いこと、悩むことがおおい日々かもしれませんが、この主の平和の内にあることを、神の憐れみの中にあることを受け取ってください。そして、そのともし火を高く掲げようではありませんか。

マルコの福音はこの群集が男だけで5000人であったこと、イエスは彼らに教え始められ、そして彼らの腹を二匹の魚と五つのパンで満たしたという奇

跡をきょうの福音に続けて 35 節から記録しています。来週は同じ場面をヨハネの福音書から読み進めていきます。
